

中学生の不登校傾向と家族イメージに関する研究

—動的家族画（KFD）の特徴からの検討—

学籍番号 16012PCM 氏名 増田 菜緒

I. 問題

1. 不登校傾向の拡がり

文部科学省（1991）は不登校に「誰もがなりうる可能性」があり、平成 28 年度現在 85.9% の中学校に不登校生徒が存在している。森田（1991）によると、登校生徒の 27.3% が登校回避感情を抱いており、この生徒たちを不登校へと転化する可能性の高い「不登校傾向」であるとした（五十嵐・萩原，2004）。こうした不登校気分の拡がりから、一般の中学生を対象に不登校について検討を進めることには意義があると考えられる（神田・大木，2000）。

2. 家族関係と家族イメージ

学校適応には家族とのかかわりが関連している。家族とのかかわりは対人関係を形成するための基礎であり（室田，1995a），家庭における居場所感が学校適応に影響を与える（鈴木，2009）。思春期の子どもは自己の内面を適切に言語化できないため、不登校の予防や対策を考えるうえでその把握が必要であるが（皆本，2003），一般中学生の不登校傾向と彼らの内面に焦点を当てた研究は非常に少ない。そこで家族関係を転写し、かつ集団実施が可能な動的家族画（KFD）の活用には有用性がある。

II. 本研究の目的

本研究では操作的に不登校傾向を森田（1991）の研究に則り不登校傾向平均得点が 3.0 点以上の生徒を不登校傾向と定義し、その生徒がどれほど存在するのかを確認する。さらに中学生の不登校傾向の特徴と以下の仮説を検討するとともに、不登校傾向となりうる生徒の内界の特徴を考察することを目的とする。

仮説：皆本（2003）の研究より不登校生徒の家族イメージは相互作用がみられず居場所のなさが特徴であったため、不登校傾向の可能性が高い生徒たちの家族イメージはこれに類似する。

III. 方法

1. 調査協力者：愛知県 A 市の公立中学校 1 年生から 3 年生の生徒計 64 名（1 年生 20 名，2 年生 21 名，3 年生 23 名）の回答を得た。
2. 実施時期と手続き：2017 年 1 月に学級担任が一斉配布し、生徒の意志のもと回収された。
3. 質問紙の構成：質問紙は、①フェイスシート、②不登校傾向尺度（五十嵐・萩原，2004）と、③室田（2000）の研究を参考に食事風景に限定した KFD と描画に関するアンケートを加えた。
4. 描画の分析；描画の分類は、描画様式を 5 分類し（①大きさ・筆圧安定タイプ ②消しがき・弱い筆圧タイプ ③人物萎縮タイプ ④描画不能 ⑤その他）検討をした。

IV. 結果

1. 分析 1：不登校傾向尺度と家族イメージ

不登校傾向尺度を主因子法およびプロマックス回転による因子分析を行い、①別室登校を希望する不登校傾向（以下「別室登校傾向」）②遊び・非行に関連する不登校傾向（以下「遊び・非行傾向」）③在宅を希望する不登校傾向（以下「在宅希望傾向」）の 3 つの因子が抽出され、信頼性分析により $\alpha = .751$ 以上の信頼性を得た。そして 21.9% の生徒が不登校傾向に該当した。

1 要因分散分析の結果、有意差がみられ ($F(2,126) = 26.776, p < .001$)、「別室登校傾向」より「遊び・非行傾向」($p < .001$)と「在宅希望傾向」($p < .001$)が有意に高かった。また、「遊び・非行傾向」と「在宅希望傾向」の間に有意な差はなかった。したがって現在の中学生の不登校傾向は、「遊び・非行傾向」と「在宅希望傾向」に分類されたため、この 2 つの特徴を KFD から検討した。

「遊び・非行傾向」の家族イメージの特徴は人物を萎縮して描画する傾向があり、食事メニューはアンケートにおいて詳細に記入できるも

のの描画では表れにくく、人物と食事までの距離が遠かった。「在宅希望傾向」の家族イメージの特徴は、消しがきや筆圧が弱い傾向が強くなり、実体のある人物であっても表情がなく、それぞれの人物が家族の誰であるのかわからない描画が多かった。また、テーブル上に食事が描かれていない描画が多かった。

2. 分析 2：不登校傾向の 6 類型と家族イメージ

不登校傾向得点の平均値以上を高群、平均値未満を低群に分類し、これらの KFD は①大きさ・筆圧安定タイプ②消しがき・弱い筆圧タイプ③人物萎縮タイプに分類されるため、それぞれの家族イメージに違いがあるのかを検討した。高群は家族と一緒に過ごしているという体験が薄いため、家庭が居場所と感じられないことが大きな特徴であり、それに伴い抑うつ的な様子が見られた。低群は家族と一緒に過ごしている空間に多少の相互作用があるものの、自分が家庭にしっかりと受け止められているという居場所としての機能が低いため、コミュニケーションが乏しい様子が見られた。よって高群と低群の家族イメージはともに家庭を居場所と感じられないという特徴をもっていた。つまり、不登校傾向となりうる程度によって家族イメージの違いはあまり見られず、中学生全体で家庭を自分の居場所として認知している可能性が低いことがわかった。さらに全体を通して父親イメージが欠損している描画が多かった。

V. 考察

1. 不登校傾向の実情について

本研究から不登校傾向気分を抱える 21.9% 生徒が存在することがわかり、この生徒たちが不登校へと転化する可能性を秘めていると言えるだろう。さらに五十嵐・萩原(2004)の研究や本研究において「別室登校傾向」が最も低く、生徒たちが不登校気分を抱いて別室を利用することがほとんどなく、いわば自宅に引きこもるか、遊び・非行行動に走るかの二極分化している可能性が考えられる。このことは、学校内に生徒の居場所がなく、教室と家庭の中間的な機能を持つ場が確保されていないことを示唆しているのではないだろうか。

2. 「遊び・非行傾向」と「在宅希望傾向」

「遊び・非行傾向」の生徒は、食事場面を回避する気分が強く、家族に代表される親密な人間関係と距離を取りたがる特性がある。そのことが、集団参加に対する抵抗感の背景要因にあるのではないかと考えられる。つまり距離をとるという自我防衛により安心を得ている。それが、学校でも家でもない場での仲間関係への志向性につながっているように考えられる。一方、「在宅希望傾向」の生徒は、他者とどのように関わってよいのかわからずに居場所感のなさが強いようである。唯一居場所として確保できる自室に引きこもる傾向が高まったと考えられる。

3. 高群と低群の家族イメージの違い

不登校傾向となりうる可能性の高い生徒と低い生徒の家族イメージに大きな違いがみられず、仮説の不登校生徒の描画に近いものがどちらの群でも存在した。これはどの生徒も家庭を居場所であると実感できないという共通点があり、どの生徒も不登校傾向になりうる可能性を秘めていると考えられる。これは対人関係におけるコミュニケーションスキル獲得以前の課題であり、生徒にとって学校も家庭も居場所として機能していないことが基本的な心の課題であると示唆される。

4. 父親イメージの欠損について

全体を通して、父親のイメージが家族団らんの場に描かれていない割合が高い。思春期の子どもにとって父親は社会化し自立を果たすために欠かせない存在である。子どもの社会参加不安は不登校傾向の高低にかかわらず、今の学校現場の普遍的課題となるものと推測される。

VI. まとめと今後の課題

今回のデータが示唆することは、①家と学校の中間的な機能を持つ居場所の欠如、②不登校傾向となりうる可能性の高低にかかわらず社会参加不安の強い生徒が多いことなどである。大人たちが中学生の不安の特質として、これらの点を理解の焦点に持つことは対応策を考えるうえで重要な視点である。

まだ仮説の域をでないが、今後は事例の蓄積などを通して検証していきたい。